

オートリカスの仲間たち

— broadside ballad 考 —

小塩 トシ子

はじめに

エリザベス朝からジェームズ一世朝初期にかけて舞台にのせられた歌は、まことに数多くあったが、それらを分類すればおよそ4種に分けられよう。すなわち1) 民謡 (folk songs), 2) 街角や村祭といった戸外でうたわれる唄 (street songs), 3) 歌曲 (the “ayres”), 4) マドリガルやカンツォネットである⁽¹⁾。シェイクスピアの作品には素朴な民謡や街角の物売りの唄から、王侯貴族の高貴な悲しい運命や美しい抒情を歌にしたものや宮廷楽士にその場にふさわしく作詞作曲させた歌曲にいたるまでが、まことに豊かな多様性をもって用いられている。シェイクスピアばかりではない。マーローにもリリーにも、ペン・ジョンソン、トマス・デッカー、アントニイ・マンデイ、ポーモント＝フレッチャーその他当時の人気劇作家たちの多くの劇作品に、歌や踊りが巧みに取り入れられている。それらは、その時その劇のために作られたものもあったであろうが、劇場と直接の関わりをもっていなかった当時の作曲家の手になる曲や、古くから民衆のあいだで歌い継がれてきた民謡も多くあったことが知られている。

このことは広く言って、当時の人々の生活そのものの根底に、歌と踊りがリズムとして流れていたこととふかい関係があるだろうし、いわば「歌文化」とでも名づけたいようなものが、エリザベス朝のイギリスには生きていたのであった。劇ばかりでなくイギリス・ルネッサンスの詩について次のように言われるのも首肯できよう。

オートリカスの仲間たち

シェイクスピアの時代の英国抒情詩は、音楽と密接な関係をもちながら存在する詩の様式であったのであり、たんに伝統・形式の故に「抒情的」だったというのではない。それを支える要素としての歌が、当時の英国人の生活のなかで、活力をもつものであった。ちょうどエリザベス朝演劇の活力の多くが、民衆劇やパジェントや祝祭という伝統のおかげで、古典の構造、人物、修辞などを融合させることによって成長し洗練されてきたのとおなじように、エリザベス朝の抒情詩もまた、バラッドを歌う習慣や、町の物売りの呼び声や踊りの歌^{ダンスソング}といった伝統と、それよりもっと洗練された宮廷での作曲つまりマドリガルといったものと混じり合った結果出てきたものである⁽²⁾。

当時のイギリスが、文化的に輸入度の高い、しかしさらにより高い国民意識に支えられつつ、社会の上・下階層を大きく包みこんだ文化の活力を生み出したことを、われわれは演劇の中にも感ずることができるのである。当時劇場に群れ集った人々の階層が宮廷人から庶民まで幅広いものであったのと呼応して、また劇作の機会や上演の場所が宮廷であったり公衆劇場であったりと幅広かったのと呼応して、劇作家、座付作者たちは彼らすべてを楽しませようと、多様な技を用いさまざまな要素を劇のなかに投入したのであった。17世紀には、階層による好み^が分化していく傾向がはっきり出てきたものの、16世紀末頃から17世紀のはじめにかけての頃つまりシェイクスピアの劇作期には、貴族と市民の趣味は、固有のものを持ちながらも、それほどかけはなれたものではなかった。したがって歌や舞踊の変化に富んだ見せ場、聞かせ場所が、貴族、庶民をともどもになぐさめ、よろこばせ得たのである。

しかしシェイクスピアの出現以前に、16世紀前半から中葉にかけてすでに、歌や踊りはコーニッシュや J. ヘイウッドによって *interludes* に組み込まれていたし、またエリザベス朝の宮廷とくに王室礼拝堂付の劇団の少年俳優たちによって演じられる戯曲に、前述のリリーやグリーン、ピールやナッシュたちや、ジョンソンやマーstonといった作家も歌を舞台に登場させていったのであった。

オートリカスの仲間たち

やがて後に宮廷を中心に流行した仮面劇にも華麗な歌や舞踊が見られる。見られるというよりむしろ、このジャンルにあっては、科白より歌と踊りが視覚的背景とともに、より本質的な要素と言うべきであろう。

17世紀はじめには、海をへだてたヨーロッパ大陸、なかでもイタリアでオペラというジャンルがモンテベルディの『オルフェオ』によってはじまり⁽³⁾、ここから演劇と音楽は分化していく。そのような芸術形式の歴史的文脈のなかでみれば、まだシェイクスピア劇の時代は未分化の状態にあったと言えよう。多様な要素がいわばごった煮のようにひとつの劇に投げこまれ、アクションの流れを一瞬とめたり早めたり、またゆるやかに観客の劇場経験をつつみこみながら、エリザベス朝演劇の混沌かつ不可思議な魅力と活力を生み出していったのであった。

さてこの小論においてはそのような「歌文化」と劇との関連のうち、もっとも民衆のレベルに密着した歌のかたちのひとつ、バラッドに目を向けるのが課題であるが、劇のなかにそれを探る前にもう少し当時の一般人たちの生活面に見られるバラッドのありかたを見ておきたいと思う。

『英国社会史』のなかでトレヴェリアンは次のように言っている。

シェイクスピア劇が散文でなく詩で書かれたことは偶然でない、というのは彼が語りかけた観客は、都鄙を問わず平凡なイングランド人であって、彼らは物語、演芸、同時代の大小の事件の来歴と報道などを運んでくる手段として、詩に馴れていたからである。オートリカスとその仲間が都市の巷と村の緑野のありふれた欲望をみたすために呼び売りをして歩いたのは、新聞や小説でなく、民謡と歌であった⁽⁴⁾。

このように当時の人々は生活のあらゆるレベルで、リズムのあることばに馴れ親しんでいたものであり、それはなにも高級な韻文や抒情詩をたしなんでいたということではむしろなくて、文盲率の高かったその頃、平凡な市民や村民のありの

オートリカスの仲間たち

ままの姿なのであった。それではトレヴェリアンの言う「民謡と歌」とはなにか。古くから歌いつがれた口誦伝説ばかりを言うのではない。もっと日常的なリズムのあることばといえるようなものであった。ここでたとえば当時のロンドンという街が、いかに活気に満ちて騒音とさえいえる音が溢れていたかをわれわれは想像してみよう⁽⁵⁾。

ロンドンの朝は、夜明けとともに、夜回り (watchman) の呼び声ではじまり、近隣の田園から搾りたてのミルクを運んで売る乳搾りたちの声、新鮮な野菜や果物そして魚などを売り歩く行商人たちの声が響き、やがて日中ともなれば、丸石敷きの道に荷台をきしませて行き交う馬車の音にまじって、小物や衣類その他の雑貨を売る行商人、いかけ屋、修理屋の高い声、奉行人の口論、宮廷人の行列のざわめき、さらにはまた Bedlam の乞食たちの物乞いをする小さく哀れな声も聞こえ、夕刻を告げる教会の鐘の音のあとには「火の用心」を呼びかける夜回りの声だけが残って、にぎやかなロンドンの一日は閉じられるといった様子であっただろう。それら物売りや夜回りの呼び声は、どれもリズムとメロディをもったいわば song と呼ばれ得るものであった。サー・ブリッジ⁽⁶⁾はこれらの歌声や呼び声を興味ぶかい一冊にまとめているが、あわせて当時の著名な作曲家たちが、この歌声に基くファンタジアと呼ばれる形式の曲をいくつも作っていることをも指摘していて、われわれの関心をそそる。こういった日常的な賑やかさは、シェイクスピアの作品のあの場面、この場面（たとえば『間違いの喜劇』『ロミオとジュリエット』『むだ騒ぎ』などの街角や群衆の集る広場などに見える）を彷彿とさせるし、祝祭的な場面（たとえば『ジュリアス・シーザー』開幕の場、歴史劇の王侯行列、祝祭的喜劇の見せ場）では、さらに活気に満ちた当時の町の様子が舞台上に再現されているとあってよいであろう。

さて巷の日常にもどって、われわれの関心事に近づかなければならない。前述した物売りたちはそれぞれ特有のメロディをもった歌の節で品物の種類や質を人々に告げ、宣伝して買い手を誘ったわけであるが、それらの歌声のなかでもひときわ耳をそば立たせたであろうのが、バラッド売り ballad monger, ballad

singer であった。これはたんに辻音楽師のようなものではなく、当時はトレヴェリアンの言う「新聞や小説」はなかったものの、このバラッドがまさにその「新聞や小説」の役目を果していたのであり、そのような情報を売りものにするのが ballad singer なのであった。今日の新聞・雑誌に相当するニュースばかりでなく、人々の好奇心を満足させる新奇な物語りを含んだバラッドが、街角で、村の道で、威勢のよい歌声にのって売られていた。弾き語りをする ballad monger, ballad singer は、今日の新聞売りのように少年であったり、また本屋を兼ねた stationer に雇われた singer であったりした。

ところでここでいうバラッドが、一般に口誦によって古くから歌われてきたフォークソングというよりは、それも含むけれども、エリザベス朝に急速に流行した印刷された形のものであることを指摘しておく必要がある。それは broadside と呼ばれる紙面にひげ文字で印刷されて売られた blackletter broadside ballad のことである。さらに歌詞だけでなく木版画が添えられ、作者の名前やイニシャルが記されることが多かった。Broadside ballad の研究者たち⁽⁷⁾によれば、バラッドすなわちそのなかに人物と物語があるうたは、印刷術が一般化する前から MS の形で流布したことはあったけれども、エリザベス女王即位の頃から18世紀のはじめまで、とくにこれが流行し、およそ 3000 titles 以上のものが出版登録されたことが知られている⁽⁸⁾。

ここでそのように流行した blackletter broadside ballads について、その内容（歌詞）と曲と歌い手がどのようなものであったのか、やや詳しく見よう。

(1) 題材と内容

『冬物語』(IV. iii. 263)⁽⁹⁾でモプサがいうことば

I love a ballad in print, a-life: for then we are sure they are true.

が示しているように、印刷されたバラッドは、実際にあった出来事を偽りなく伝えるものと一般に考えられていた。その出来事は、政治的、宗教的にトピカルなものから、今日で言えば週刊誌や新聞の三面記事の対象となるような、スキャンダラスなゴシップ風のものまで含んでいた。まずたとえば、“A Ballad on the Downfall of Thomas Lord Cromwell” (1540) などといった早い時期のバラッドから、エリザベス女王の1588年、スペインの無敵艦隊を撃滅して凱旋したときに作られた“A Joyfull Ballad of the Royal Entrance of Queen Elizabeth into her City of London the — Day of November, 1588”⁽¹⁰⁾、“New Song of the Triumphs of the Tilt before the King, the 29th of March, 1604, to the Tune of Braggendarty”といったトップ記事並のもの。政治的宗教的題材を扱ったものには、当然諷刺をねらったバラッドやそのパロディが作り出され、当局から印刷、発売を禁止される者、その禁を犯して投獄される者も出ている。これらよりやや社会面向きのものでは、ロンドンに地震が起きると次の日には、二度とこの恐しい現象が起きて町が壊滅の不幸に遭わぬよう、すべての人々は悔い改めるべし、という、いわば“looking-glass ballads”⁽¹¹⁾と呼ばれる ballad が早速にも作られた。また次のようなものもある。“A Wonderful and Strange News which happened in the Counties of Suffolk and Essex the first of February [1583], being Friday, where it rained Wheat the space of six or seven Miles compass”⁽¹²⁾ とか “Seventeen Monstrous Fishes, taken in Suffolk” といったバラッドができ、後者はストウの『年代記』（1574年。ただし17匹ではなく18匹として）にも指摘され、ホリンシェッドも傍証している⁽¹³⁾。三面記事的なスキャンダラスなものも多く、後述するような“a filthy tune”と呼ばれるものは今日のゴシップ欄と少しも変わらないようである。しかし街角で歌われる恋物語を内容とするバラッドには、比較的健全なものもあり、たとえば popular となった“Jane Shore” とか “Mary Ambree” とか “The Constancy of Susanna” などは、フランソワ・ラブレーが書きとめた “The Dumb Wife” などとおなじように長命を保って後代まで記憶され、歌われた。これらよりもっと古くから続いて

題材となっていた“Robin Hood”シリーズといえるバラッドや，“Arthur and the Table Round”，“Wandering Jew”など，ロマンスの題材をバラッド化するものも多くあった。恋する男女の悲劇的挿話をつづる歌などは，町から村へ，村から田園へと伝えられ，羊飼いの娘や乳搾りの娘たちが，覚えては歌い，歌い継いでいったりした。

これらのバラッドの作詞者として当時とくに著名だったのはThomas Deloney, William Elderton, Lawrence Price, Martin Parker, Richard Johnson などであり，その名前は broadside ballad のはじめや終りにイニシャルその他の方法で書き添えられていた。彼らの歌はヒットして売れ行きがよいと，出版登録のために支払いはしても，かなりいい収入になり，当時の pamphleteers 同様，劇作家たちの収入を上回ることもあったらしい⁽¹⁴⁾。概して一流の劇作家や詩人たちは broadside ballads を買って読み，その作品の中に自由にとり入れたり活用したりはしたものの，評価は低く無視や軽蔑に近かったことがうかがい知れる。だがしかしわれわれはここで，たとえば一時代前の桂冠詩人 John Skelton や，宮廷文人 John Heywood がある種のバラッドをつくったこと，シェイクスピアの時代にもマンデイが，長い従弟時代にバラッド作りで腕を磨いたこと，マーローやシェイクスピアさえバラッド作りに手をつけたかも知れないことを記憶すべきであろう。一般には偉大な詩人たちは概してバラッドを軽蔑し，二流はこれを羨望したということであつたらしい。ともあれ 200 人を下らぬバラッド作りがエリザベス朝のロンドンに居り，印刷する場所が40軒にも及んだという記録の数字は驚くべきものではないだろうか。そして作られ印刷されたバラッドのいくつかが集められて，われわれはいまも「歌の花束」(Garlands)の中にそれらを知ることができるわけである。すなわち *The Court of Venus* (1557～), *Tottel's Miscellany* (1557～), *The Paradise of Dainty Devices* (1576～), *A Gorgeous Gallery of Gallant Inventions* (1557～), *A Handful of Pleasant Delights* (1584～), *Phoenix Nest* (1593～), *A Poetical Rhapsody* (1602～)などを挙げることはできる。とくに *A Handful* は broadside ballads のみを集めたもの

として知られている。

この項の終りに、シェイクスピアがこの種のバラッドをどう見ていたであろうかを、作品中の登場人物の科白から管見しておこう。後に劇作品との関係については論じることになるが、ここでは二・三言及のある箇所を見ておきたい。バラッドの題材となって巷に話題を提供すること自体、まず恥しいことであり、それを逆手にとってフォールスタッフはハル王子に向かって次のように言う。

Go, hang thyself in thine own heir apparent garters! If I be ta'en I'll peach for this. *An I have not ballads made on you all, and sung to filthy tunes, let cup of sack be my poison...*

— *Henry IV*, Pt. 1. II. ii. 50 ff.

[イタリック筆者、以下同じ]

このようにバラッドに歌われることは不名誉にもなるけれども、また同時に論功行賞のバラッドもあって、フォールスタッフは自分のことはそのような歌に肖像画までつけて作って貰いたがっている。

…… and I beseech your Grace, let it be booked with the rest of this day's deeds; or, by the Lord, *I will have it in a particular ballad else, with mine own picture on the top on't*, Colevile kissing my foot.

— *Henry IV.*, Pt. 2, IV. iii. 50 ff.

ボトムも『夏の夜の夢』(IV. i. 221)の中で、自分の見た夢をピーター・クィンスにたのんで一篇のバラッドに仕立ててもらおうと言うし、『お気に召すまま』(II. vii. 148)ではジェイクィズが例の七幕物の人生劇について語る条りで、恋人がふいご吹きのようにため息をつきながら恋のうたを作る (*a weoful ballad/Made to his mistress' eyebrow*) と言う。宮廷人おかかえの道化たちが、いつ

オートリカスの仲間たち

でも求められればバラッドのひとつやふたつ歌えたことは、次の例によっても容易に知られる。

Is there not a ballad, boy, of the King and the Beggar?

.....

The world was very guilty of such a ballad some three ages since.

— *Love's Labour's Lost*, I. ii. 114 ff.

[Clown] For I the ballad will repeat,

Which men full tune shall find;

Your marriage comes by destiny,

Your cuckoo sings by kind.

— *All's Well*, I. iii. 64-67.

これらに、『十二夜』(II. iii.)の深夜の無礼講で、フェステはじめサー・トウビーやサー・アンドリューが飲みながら次々にうたう歌のなかにバラッドのいく節かがとび出してくる例を加えて見れば、多様性は十分に知れる。

こういった道化や喜劇的場面に言及されるバラッドに対して、王侯貴族たちの科白に見えるのは、もっと冷やかな見方、反応であり、こちらの方が劇作家シェイクスピアの見方に近いのかも知れない。たとえばホッツパーの次のようなことば

I had rather be a kitten, and cry mew

Than one of these same metre ballad-mongers;

— *Henry IV*, Pt. 1, III. i., 128-9

や、ヘンリー五世の

オートリカスの仲間たち

What! a speaker is but a prater; a rime is but a ballad.

— *Henry V*, V. ii. 167

という科白，そしてクレオパトラのことば

Nay, 'tis most certain, Iras. Saucy lictors
Will catch at us, like strumpets, and *scald rimers*
Ballads us out o' tune; the quick comedians
Extemporally will stage us, and present
Our Alexandrian revels.

— *Antony and Cleopatra*, V. ii. 215 ff.

は次のコリオレイナスの科白と同様に，歌のなぐさみに対する貴人の超然たる姿を表現している。

This peace is nothing, but to rust iron, increase tailors, and bread
ballad-makers. —Let me have war.

Coriolanus, IV. v. 235

平和な時代のなぐさみ，遊びに近いバラッドは，このようにしてシェイクスピアにとって，純粋な抒情詩などとはちがって，真剣にとり上げるべき詩の形ではなかったであろう。にもかかわらず，巷に流布したバラッドをよく知り，適材適所にその歌を配置して舞台を盛り上げたことも事実であった。その点は後刻，作品を取り上げて論ずるときに詳しく述べるとして，次にこれらのバラッドがどのような調べ，曲にのせて流布されたのかに目を向けよう。

[2] ^{チューン}曲について

バラッドの歌詞については、前述の「歌集」(Garlands)の他、Pepys, Bagford, Roxburghe らのコレクション⁽¹⁵⁾と、Child の集成した五巻本⁽¹⁶⁾が金字塔の如く存在するように、それらの歌がうたわれた曲 ballad tune についていえば、なんといってもまず Chappell の業績を挙げなければなるまい⁽¹⁷⁾。こういった業績のおかげでわれわれは、broadside ballad がどのような tune にあわせてうたわれたかを知ることができる。

ところで小論のはじめに歌の4区分 1) folk songs 2) street songs 3) the “ayres” 4) madrigals & canzonets を挙げておいたけれども、E. S. Lindsey の区分では 1) ballad tune 2) the “ayre” 3) the madrigal となっており⁽¹⁸⁾、ballad tune には、とくにつよい単純なリズムがあり、民衆の身近かな歌として、エリザベス朝の舞台で好んで用いられたのであった。folk songs と呼ばれているものは、ballads か three-man songs や catches とか rounds といわれる 3 parts にわかれてうたわれる tune であった。それらとバラッドのちがいは、前にも述べたように、知られた作者によってつくられた歌詞を folk tune にのせて、一声でうたう点にあるといつてよかろう。また ayre や madrigal とちがうのは、これらが宮廷人や貴族が好み、リュートその他の楽器にあわせてよく訓練された声の持ち主にうたわせたことであろう。したがって劇の中でもこれらの歌曲を受けもつてうたうのは、聖歌隊の少年俳優や楽士として訓練を受けた者たちであったろう。イタリアからフランスを経て入ってきたマドリガルは、とくにイギリス・ルネサンス期に洗練された形式をつくり上げ、元来ポリフォニックな声楽曲の得意なイギリス人に愛され、多くの曲を生み出していたのだから。

著名な作曲家たちも教会音楽ばかりでなく ayres や madrigals をつくるようになっていた。1588年にイタリアよりほぼ半世紀おくれてイギリスで最初のマドリガル集 (*Musica Transalpina*) が出版され、1590年には Thomas Watson が

Italian Madrigals Englished 第1集を編集している。1597年はイギリス音楽史における *anno mirabilis* のひとつと呼ばれるが、それは *Musica Transalpina* 第2集が出たことに加えて、Thomas Weelkes 編の *Madrigals*, J. Dowland の *First Book of Ayres*, Thomas Morley 編の *Italian Canzonets*, おなじく Morley の *Plain and Easy Introduction to Practical Music* という音楽理論と実習の指南書が出版された年だからである。W. Byrd, Thomas Weelkes, John Wilby などがマドリガル曲をつくり、ややおくれて Orlando Gibbons, Robert Jones, Thomas Tomkins, Frances Pilkinton らが輩出している。又 John Dowland がリュート用の多くの傑出した曲を後代に残したことはよく知られているところであり、Alfonso Ferrabosco 父子も宮廷音楽家として名高い。さらには Thomas Campion や Nicolas Lanier など声楽曲の作曲家として忘れてはなるまい。このように概観しただけでも、ルネッサンス・イギリスの音楽（ことに^{ソング}歌曲の分野を今は見ているのであるが）状況はたいへんに盛んであったことが知られる。この状況のなかで、民衆のレベルでもまた、歌はさかんに愛されうたわれていたのであり、いったん popular になった曲は、くり返えし歌詞を変えてうたわれ続けたのであった。

宮廷詩人たちや劇作家たちも、上に挙げたような洗練された楽曲に合わせてうたう詩のことばを書いており、シェイクスピアの劇のなかにもわれわれは、宮廷風楽曲も、民衆に人気のあった曲も共々に多くはめこまれているのを知っている。われわれの関心である、バラッドの曲については、W. Chappell や C. M. Simpson の大部なコメントつき研究書があるのは有難い。

当時の broadside ballad には title とそこに “to the tune of …” という曲の指定がなされていることが多い。そしていったん流行した人気の曲は、くり返えし別のバラッドや替え唄風のパロディに使われた。たとえば現代まで長命を保っている “Greensleeves” の曲は、当初失恋の嘆きをうたったバラッド「緑の袖のつれなき女^{ひと}」であったものが、その美しくも哀調をともなった曲のヒットで、さまざまなバリエーションやパロディの曲としてうたい続けられ、着こなしのすぐ

れた婦人をうたった歌となるかと思えば、逆に courtesan の歌となったり、「処女のいろは」というお説教風の歌としてうたい継がれ、18世紀には John Gay の『三文オペラ』に取り上げられ、やがて19世紀にはアメリカに渡ってクリスマス・キャロルとして蘇生していく。このバラッドは *A Handful of Pleasant Delights* (1584) にその歌詞がかかげられているが⁽¹⁹⁾、出版登録のもっとも古い記録は1580年9月であった。その後1年くらい民衆のあいだで爆発的な人気を呼んだらしく、おどろくほど多くの異句同曲のバリエーションを生み出したのであった。シェイクスピアはじめ当時の劇作家の作品のなかでこの曲への言及が少なからず散見するのも、このような事情があったことを傍証していよう⁽²⁰⁾。

この“Greensleeves”の曲がおよそ80の歌の曲として親しまれたといわれるのに対して、それを上回る100をこえる歌の曲としてうたわれたのは“Packington’s Pound”であった。エリザベス女王の寵臣パッキントンをうたったバラッドであったものが、次々にその歌詞の衣を替えていき、やがてわれわれに親しい曲となるのはジョンソンの『パーソロミュー祭』(III. iv.) で、ballad singer ナイチンゲールがうたう例の

My masters and friends, and good people draw neere

And look to your purses, for that I doe say ……

とはじまる、後に“The Cutpurse”巾着切りと呼ばれるようになったバラッドの曲としてであろう。ナイチンゲールの歌のおわりは

Youth, youth, thou hadst better bin staru’d by the Nurse.

Then live to be hanged for cutting a purse.

としめくくられていて“The Cutpurse”と渾名された由来がわかる。後代のコレクションにこの曲でうたわれたバラッドの例は多く見られるし、また『三文オペ

オートリカスの仲間たち

ラ』を含むいわゆるバラッド・オペラにはこの曲とこの refrain を用いたものが五指に余ると言われている⁽²¹⁾。なお ballad singer としてのナイチンゲールについては、オートリカスの仲間として小論の後段に登場してもらうことにして、その他2・3の曲にふれておこう。

シェイクスピアが『ロミオとジュリエット』(IV. v.) で楽士に「音楽を」とうながす場面で言及する“Heart's Ease”というバラッドもまたよく用いられた。

Peter. Musicians! O! musicians, ‘Heart’s ease, Heart’s ease:’ O! an
ye will have me live, play ‘Heart’s ease.’

First Musician. Why ‘Heart’s ease?’

Peter. O! musicians, because my heart itself plays ‘My heart is full of
woe;’ O play me some merry dump, to comfort me. (ll. 102-108)

「こころは悲しみにみちて」といっているのも Chappell によれば, “A pleasant new ballad of two Lovers: to a pleasant new tune” のくり返し部分 (burden) である⁽²²⁾。“Heart’s Ease” はエリザベス朝初期から知られたバラッドの曲で次のようにはじまる。

Sing care away, with sport and playe,

Pastime is all our pleasure;

If well we fare, for nought we care,

In mearth consists our treasure.

.....

It is the best to live at rest

And tak’t as God doth send it;

To haunt ech wake and mirth to make,

And with good fellowes spend it.⁽²³⁾

憂いに沈みがちな心をひき立てようとして、このバラッドがこの場(*Romeo*, IV. v.) で歌われたなら、『ロミオ』の悲劇に束の間の relief が生来したかも知れないが、この ‘Heart’s Ease’ はうたわれぬまま、悲劇は先へと進んでいくのであった⁽²⁴⁾。

悲劇のなかのバラッドで、さらに印象ぶかくわれわれの心を打つのが、“Walsingham” の曲でうたわれたであろうオフィーリアの “How should I your true love know from another one?” (*Hamlet*, IV. v. 23 ff.) であり、またデズデモーナの「柳の歌」 Willow, willow (*Othello*, IV. iii. 41 ff.) のバラッドであろう。「柳の歌」は *A Gorgeous Gallery of Gallant Inventions* (1578) にすでに収録されているが、そこで歌われているのは男性であるのに対してシェイクスピアは女主人公に歌わせるものとして変更を加えた⁽²⁵⁾。これらは “Fortune my foe”⁽²⁶⁾ などと同様、当時の劇作家の言及が多かった。ほかに、“Light o’ Love”, “Peg a Ramsey”, “Fortune my foe”, “Tom a Bedlam”, “The Hunt is Up”, “The Spanish Pavan, or Tarlton’s Medley” などは当時 popular な曲であった上、シェイクスピアその他の劇作家たちにとり上げられて、今日のわれわれにも親しいものとなってきている。

以上のように blackletter broadside ballad について、その内容と曲の両面を見てきた。このタイプのバラッドは本来の性質が都会的なもので、ロンドンはじめイギリス全体が社会的活力の上昇期に生れ、政治や宗教をその関心事としたが、さらにその題材の範囲をひろげてニュース的なもの、人の好奇心を満足させる恋の成行きをうたうもの、その日その時期の人々の耳をそば立たせたゴシップなどを扱う歌が多くできていった。Broadside ballad の普及は伝統的な職業吟遊詩人の衰退とほぼ一致していて、時代の変化に呼応している。1557年から1709年までのあいだ⁽²⁷⁾に 3000 titles 以上が登録されたというのはまさに壮観というほかないであろう。これほど多くの題のバラッドがつくられたのに対して曲の方は当然ひとつひとつ別のものがつくられたわけではなくて、曲として人々に親しみやす

オートリカスの仲間たち

いものは愛唱され、ことばを替えてくり返えし歌われていった。そしてこのバラッドの歌い手 ballad singer は、stationer に雇われた者であれ、歌好きの行商人兼用のバラッド売りであれ、巷の人であり民衆の人気の的ともなりうる者であった。『冬物語』(IV. ii.-iii.) に登場して羊毛刈り祭りの場をその歌でいやがうえにも盛り立てる役目を果たすオートリカスはそのような人物であったが、登場前の一節を見ておこう。

下男. これは旦那様、ちょっくら玄関先に来た行商人の唄をきいてごらんになりや、以後は笛や太鼓に合わせて踊るなんてことはなさるまいに。まったく、風笛にだって踊る気はおこらんですよ。あいつあ金かぞえるより早う、いろんな節をつぎつぎ唄いますだ。唄を食いこんだみてえに、出してくるもんで、みんな耳がその節にひっぱられちまいますだ。

道化. 願ってもないときに来おるわ。お通ししな。わしや唄は大好きでな、悲しい話が陽気な唄になったり、じっさい陽気なのが、悲しげに歌われたりな。

下男. あいつあ、男向き、女向き、大小さまさまの唄をもってまさ、どんな小間物屋だって、あんなにぴったりとお客に合う手袋はそろえていませんや。若い娘向きのかわいらしい恋の唄など、めずらしいことにちっとも淫らなところがねえ、ディルドー、フェイディング「女を叩け、なぐりつけろ」なんて愉快な折返しがついてますぜ。……

(4幕3場181行以下)

やがて当人オートリカスが登場してふんだんに舞台に歌をふりまくことになり、前後450行ほどのあいだに彼の6回の歌が集中している。舞台ばかりでなく劇場そのものをまるごと包みこむような歌の連続が、その場の cornu copia の豊穣さをまた盛り上げていく。後代ミルトンが、シェイクスピアについて “his wood-notes wild” と讃えていったことばは、これら民衆の歌声を代弁するようなバラッドの活用ぶりについても言われ得ることのように思われるのである。

シェイクスピアの劇中にはめこまれる歌の数々のうち、バラッドが用いられた意味と役割、そしてまたオートリカスの仲間と呼び得る、シェイクスピア以外の作品中に登場する ballad singer たちについては、次稿に詳論することにして、ここでひとまず筆を擱く。

〈注〉

1. John H. Long, *Shakespeare's Use of Music: A Study of the Music and Its Performance in the Original Production of Seven Comedies* (Da Capo Press, 1977), p. 1.
2. Hallett Smith, *English Poetry: A Study in Conventions, Meaning, & Expression* (Harvard University Press, 1970. 4), p. 258.
3. 1600年。これをもって opera の嚆矢とするのが音楽史の常識とってよい。
4. 林健太郎訳『英国社会史』(山川出版社, 昭和24年) 第1巻 320頁。
5. Cf. Anthony Burgess, *Shakespeare* (Jonathan Cape, 1970) pp. 70-83.
6. Sir F. Bridge, *The Old Cryes of London* (Novello & Co., London, 1926). 彼によれば London で記録されているもっとも古い物売りの声は “London Lickpenny (or Lackpenny)” で John Lydgate (1370-1450) によるものとされる。
なお又, Sir F. Bridge, “The Musical Cries of London in Shakespeare's Time” (Proceedings of the Musical Association, Dec. 1919) pp. 15-6 も参考になる。
ここに Sir F. Bridge が挙げた ballad titles をいくつか写しておこう。
“Broomes for old shooes”, “Pouch rings”, “Bootes and buskings”, “New oysters”, “New cockles”, “French herrings”, “Will you buy any straw?” “Hay yee any kitchin stuffe, maides?”, “Pippins fine”, “Cheerie ripe”, “Hay any wood to cleave?”
The Watchman's Songs “Give eare to the clocke”.
7. C. H. Firth, ‘Ballads and Broadside’ in *Shakespeare's England* (Oxford, 1917)
L. Shepard, *The Broadside Ballad* (Herbert Jenkins, 1962)
Hyder E. Rollins, “Blackletter Broadside Ballad” *PMLA*, XXXIV, 1919, pp. 258-339.
なおわが国でも小野二郎氏が最近『紅茶を受け皿で』(晶文社, 1981) の中で broadside ballads を扱っておられるが、そこでは18世紀以降とくに19世紀のもので white-letter broadsides が中心に述べられている。
8. Hyder E. Rollins, *An Analytical Index to the Ballad Entries, 1557-1709* (Tradition Press, 1967)
9. Text からの引用はすべて *The Oxford Shakespeare* (ed. W. J. Craig) による。
10. Arber's Transcript, II. p. 506. Cf. Rollins, “Blackletter Broadside Ballad”, p. 269.

11. Rollins, *op. cit.* p. 270.
12. Arber's Transcript II. p. 420. しかしこれは Rollins によれば a prose pamphlet となっている。Rollins, *op. cit.* p. 267.
13. Rollins, *op. cit.* p. 272.
14. Cf. Rollins, *op. cit.* pp. 296-298.
15. Pepys のコレクションは後代の whiteletter ballads も含み1700篇以上, Bagford は 355, Roxburghe コレクションは1400篇を数える。
16. F. J. Child, *The English and Scottish Popular Ballads* 5 vols. (London, 1857—1892)
17. W. Chappell, *Popular Music of the Olden Time*, 2 vols. (London, 1855); W. Chappell & H. E. Wooldridge ed., *Old English Popular Music*, 2 vols (London, 1893) なお, この他に C. M. Simpson, *The British Broadsheet Ballad and its Music* (Rutger's U. P., 1966) や, もっとひろく見るものに Bruce Pattison, *Music and Poetry of the English Renaissance* (Methuen, 1970. 2) があり, とくにその chapter IX はバラッドを扱っている。
18. Cf. J. H. Long, *op. cit.* pp. 12-13.
19. Cf. Vincent ed., *Fifty Shakespeare Songs* (AMS, 1973)
20. 拙稿「あるバラッドの物語」フェリス女学院大学英文学研究会会誌第15号 (1982) 1-12頁参照。
21. Cf. Simpson, *op. cit.* p. 570.
22. Chappell & Wooldridge, *op. cit.* Vol. 1, p. 99.
23. *Loc. cit.* 1560年頃作られた Interlude *Misogonus* by Lawrence Johnson (?) の II. ii. でうたわれて後流行したらしい。これについては又, *Shakespeare Society Papers*, Vol. 24, 1844, pp. 12-16 が参考となる。
24. なお Heart's Ease は, 恋の花「三色すみれ」の別名とも言われるが, シェイクスピアはこの場面に隠された意味をこめているのだろうか。
25. Cf. *Shakespeare Society Papers*, Vol. 24, 1844, pp. 44-46.
26. 1589年 Richard Jones が出版許可を得た “Fortune my foe of the life and death of Dr. Faustus the great Cunningerer” がはじめて, 後代の劇とくにジェイムズ朝に多く取り上げられ80曲を数えた。17世紀後半に Aphra Behn の戯曲 *The Roundheads* (1682) にも登場する。Cf. Simpson, *op. cit.* pp. 225-231.
27. 注8に挙げた Rollins の *Index* は Edward Arber 編 *A Transcript of the Registers of the Company of Stationers of London; 1554-1640.* に基いているが, 個人の努力と同時に, 大火をまぬかれた (1666年の大火から第2次大戦まで) 幸運が重なって, これらの記録が現在も保持されていることは指摘しておくべきかと思う。なお1709年は copyright legislation ができた年で, この時点からバラッドづくりは下火となる。